

国際ロシア語・ロシア文学教師連盟 第12回大会に参加して

堤 正 典

国際ロシア語・ロシア文学教師連盟はロシア語の略語から「マプリアル (МАПРЯЛ)」と呼ばれており、1968年にモスクワで第1回大会が開かれて以来、現在は4年に一度開催されている。これまではロシアや東中欧のみで開かれ、今回は中国・上海での開催で、初めてのアジアでの大会となった。ヨーロッパからは遠い地にもかかわらず、48か国から1200名が集まったということである(スポンサーとなったアエロフロート・ロシア航空が無料のチャーター便を出したこともその手助けとなったらしい)。しかし、隣国の中国での開催にもかかわらず、日本からの参加はごく少人数にとどまっており、しかも震災の影響もあって、エントリーしながら欠席せざるを得なかった方々もあった。日本からの参加者で報告を行ったのは、私と小林潔特任准教授を含めて、6名5組のみであり(代理での報告がさらに1件)、その他、報告を行わない参加者もごくごく少人数だったようだ。このことはまったく残念であるが、少ないからなのか、我々は「日本からの同僚」と様々な人に声をかけられ、大会期間中、非常に楽しく過ごすことができた。

この大会は、2011年5月11日から14日まで、上海郊外の上海外国語大学松江キャンパスで行われた。このキャンパスは建物がそれぞれの学部学科で学ばれる言語の地域の趣をもったものとなっていて、例えば、ロシア語学部の建物はロシア正教会風の玉ねぎ型のドームがついており(もちろん先頭の十字架はないのだが)、日本文化経済学院は日本庭園で囲まれた瓦屋根風の建物であった。広大な敷地のほぼ中央には巨大な図書館が聳えており、その前は噴水なども配置され、テーマパークかと思われるような美しいキャンパスであった。

5月10日午後上海虹橋空港に降り立つと、マプリアルのボードを持ったボランティア学生が待っていてくれ、マイクロバスで大学近くのホテルに連れて行ってくれた。そろい水色のTシャツを着た学生ボランティアは、この大会を通して大活躍であった。参加者はみな大学周辺のホテルに分かれて宿泊することになっていた。フロントで宿泊のチェックインと大会登録の確認をすまし、部屋に落ち着くと、私の部屋からは上海外国語大学のキャンパスが見えた。その晩から、同じホテルに泊まった参加者は、三食同じレストランで食事をとることになり、多くの人々と会話を交えることができた。

大会は、11日の開会式と14日の閉会式を含む全体会議と、その間の2日間の分科会や円卓会議に分かれ、夜にはコンサートなどの文化プログラムも用意された。我々が参加した分科会「外国語としてのロシア語教育の歴史と教育方法の革新」は、2日間の午前午後をすべて使って報告と活発な討論が行われた。

14日の閉会式と全体での懇親会のあと、上海へのエクスカージョンにも参加してみた。大型バスを連ねて上海の街中まで行き、豫園等に寄ったのちに、船で夜景を楽しむことができた。参加者はロシア人が多く、もちろんその他の参加者や中国人ガイドもロシア語で話すわけで、中国の上海をロシア語の中で観光するという、今考えるとちょっと不思議な小旅行であった。

上海は10年以上前に来たのが最後であったが、この出張を通して、中国の大きな活気を感じた。震災直後の日本から来た成果もあるかもしれないが。

2011年は、マプリアル第12回大会の他に、11

月に札幌で開催された北海道大学スラブ研究センターと国際スラヴィスト会議スラブ語文法構造研究部会との共同主催による国際シンポジウム「スラブ諸語における文文化と語彙化」にも参加できた。こちらは、マブリヤルに比べると小ぢんまりとしたものであるが、私にとっては専門により近

い分野の催しで、ロシアをはじめ各国のスラブ語学者と交わることができ、大変楽しく、かつ、大変勉強になった集まりであった。マブリヤルにしても、国際スラヴィスト会議にしても、国際学会は大いに刺激を受ける催しである。

ロシア語教育研究の動き2011 —日本ロシア語教育研究会の活動を中心に—

小林 潔

日本ロシア語教育研究会は決して大きな組織ではないが、全国各地の大学・高専・高校等のロシア語教師および大学院生の集まりで、メンバーの属性も専任・非常勤、ロシア語ネイティブそして日本人講師と様々であり、定期的にイベントを企画し研修の機会を設けている。筆者は2010年12月から11年12月まで事務局をつとめた。

2011年度は以下の3つの大きな集まりがあった。これは、研究会前代表の林田理恵教授（大阪大学）を研究代表者とする科研費企画「大学間、高等学校—大学間ロシア語教育ネットワークの確立」（基盤B、2011-2015年度）とも密接に関わっている。本学堤教授および筆者もこの企画の研究分担者である。

1：サマーセミナー2011「ことば力・つける・はかる」。8月17-18日に富山県の立山山麓温泉「森の雫」にて泊まりこみで行ったもので、内容は以下の通りである。

講演1：野村和宏（神戸市外国語大学）「外国語授業の活性化をめざして—英語教育からロシア語教育へ活かすもの—」

講演2：カザケーヴィチ・マルガリータ、林田理恵（大阪大学）「CEFR基準ロシア語スピーキング、ライティング評価法」

野村講演は、氏自身の実践報告であると同時に教員どうしの研修の意義を再確認するものであった。カザケーヴィチ・林田講演はむしろ研修というべきもので、ロシア教育省認定ロシア語検定試験について、受験者の答案例をもとに出席者も自らの採点案を作り検討し、スピーキングとライティングという評価が困難な領域の取り扱い方を学んだ。

2：日本ロシア文学会2011年度総会・研究発表会
プレシンポジウム「ロシア語発『外国語教育連携の時代へ—生涯教育から外国語教育を考える—』」。
10月7日に慶應義塾日吉キャンパスにて開催（共催：中国語教育学会、日本フランス語教育学会、日本独文学会ドイツ語教育部会、日本ロシア語教育研究会）。（同時にパネル展示「大学でのロシア語教育の今を語ろう—情報交換ラウンジ "R 3 Y O"—」も行われ、神奈川大学を含む各大学でのロシア語教育の紹介がなされた。各校の履修形態や教材、留学・海外研修などの企画を示し情報交換と経験交流をはかったものである。）

プレシンポでは、ロシア語現場報告として加藤純子（関西大学・大阪大学）、熊野谷葉子（慶應義塾）、竹内敦子（関東国際高校）、柳町裕子（新潟県立大学）、依田幸子（北海道古平高校）が登壇したほか、筆者も報告を行った。続けて、パネリスト報告として境一三（独語：慶應義塾）、大木充（仏語：京都大学）、跡部智（英語：慶應義塾）、古川裕（中国語：大阪大学）が登壇した。司会は白山利信（露語：筑波大学）および林田教授である。それぞれの教育機関でそれぞれのやり方で言語教育に関わっている者たちの協働の一步として有意義な企画であった。

3：ロシア語教育研究集会・総会 2011。12月4日於東京外国語大学本郷サテライト。研究会集会と同時に林田科研の報告会も兼ねるものであった。研究報告は4本で以下の通り。

高木美菜子「ロシア語教材例文データベース作成における教育現場のための検索語と索引」

三浦由香利（神戸大学）「文法学習を運用練習に繋げる試み—動詞変化形提示ツールを利用して—」

加藤純子（関西大学・大阪大学）「仕事と生活に関する対話と記述—大阪大学マルチメディア教材における交流の状況設定—」

須佐多恵（大阪大学）「フィンランドにおけるロシア語教育の現状」

高木、三浦、加藤報告はITを活用した教材・教室活動についてである。須佐報告は、本学堤教授、クロチコフ氏（駒澤大学）、筆者とともに2011年9月に行ったヘルシンキ訪問に基づく。

林田科研では「TRKIとロシア語能力検定とを用いた各教育機関の現状把握および両試験の比較」と題して、ロシア教育省認定ロシア語検定試験(ТРКИ)と日本国内の検定試験との比較を行った。それぞれの教育現場で受講生に二つの試験に取り組んでもらい、その結果を分析したものである。当日不参加の報告者も含めて高校・高専・大

学の13の教育機関での結果が報告された。各機関におけるカリキュラムとの関連の考察、試験そのものの内容比較など今後の研究につながる企画であった（なお、学生の個人情報絡むこうした題材の取り扱いに注意を要することは研究会でも既に認識されており、然るべき配慮がなされる）。生涯教育を念頭に各教育機関を通じて教育・学習を「つづける」・「つなげる」ことを目指し、それぞれの現場の問題点を明らかにし、将来的にはロシア語人材の「入口」「出口」をも視野に入れてロシア語教育を考えていこうというのである。

目前の学生を大事にすることは言うまでもないが、将来を目指すことも必要である。他の言語の教育研究に比べれば遅れをとってはいるがロシア語に関しても教育研究は盛り上がりを見せはじめた。2012年度は9月23日(日)に「ロシア語母語話者家庭の子供たちにおける母語継承教育」(仮題)をテーマとしたセミナーが、また12月2日に研究集会が開催される予定である。

大学院という幸福

廣瀬 富 男

大学院の科目を提供することになり4年目にして初めて受講生が現れた。内容が「生成文法」だけに履修する学生などそうはいまいと高を括っていたのだが、時には志向が合うこともあるようだ。

現在読んでいるのは、受講生の関心を考慮して、昨年 MIT Press から Linguistic Inquiry Monographs シリーズの一つとして出版された Phil Branigan の *Provocative Syntax*。ミニマリズムを採用し、移動現象を包括的に扱う仕組みを提案している野心作である。

さて、授業であるが、学部と違い、あまり「教える」という意識がない。学部の授業は、相手も素人で、少しでも「生成文法」の思考法に馴染んでもらいたいと思うから、理路整然とした解説を心掛ける。それに対して、大学院生、殊に「生成文法」の何たるかをそれなりに理解している相手だと容赦がない。扱っている内容が理論展開の最前線ということもあるのだが、明快な説明への腐心などはどこへやら、一学徒に戻り、目の前に座っ

ている前期課程に入ったばかりの学生に矢継ぎ早に問いかける。いきおい語り口もぞんざいなものになっていく…。

「そんな、LFでは中間痕跡が全部消えてなきゃいけないって言ってもさ、そんなことしたら、Which picture of himself did John say that Bill liked best? なんか困るんじゃない」

「えっ？」

「だって、himselfの先行詞って、Johnでもいいんでしょ? でもって、その解釈を可能にするのは、中間痕跡なんじゃない」

「あっ、そうですね」

「Braniganが出してる例は、The students asked what attitudes about each other the teachers had noticedだから、中間痕跡が関係しないんだよ。何だかねえ…」

こんな具合に、まるで勉強会や研究会にでも参

加しているかのように授業をしていると、90分はあっという間で、気がつくとき計が13時近くを指していることも多い。付き合わされる受講生には

申し訳ないが、少なくとも研究室にいる間、学務に苛まれ、研究に没頭しづらい状況にある当方にとって、大学院の授業は至福の時間となる。

愛しき若者言葉

富谷 玲子

「最近の言葉は乱れている」という批判をししばし耳にする。発言者は年長者であり、自分より若い人たちが使う言葉、特に大学生や高校生の世代が使う言葉を非難して云うケースが圧倒的に多い。しかし、日進月歩で通信技術が進化し、コミュニケーション・ツールも多様化するに従って、新しい媒体には新しい名が与えられ、新しい動作には新しい動詞が与えられるのは必然の帰結である。さらに、通信ツールに字数制限が加わるならば、少しでも短くしかも多くのニュアンスを伝えることのできる言葉が自然発生するのは当然である。また、文化が成熟し、ほんの少しの差異に意味を見出す若者の間では、それぞれの持つ微妙なニュアンスを表現すべく様々な新語が生みだされる。そして、文化間の激しい生き残り競争に打ち勝った語は大勢の使用者を獲得しおそらく百年後には辞書の見出し語を飾ることになるだろう。一方、惨敗した語は短期間で消えていくのである。

今年も、授業を通じて、おしゃべりを通じて、またツイッターやフェイスブックを通じて学生からたくさんの素敵若者言葉を教えてもらうことができた。言語には、理解言語と使用言語がある。使用言語、つまり自分自身で使いこなすことが出来る言葉より、理解言語の方がはるかに多いのが普通である。毎日の新聞やテレビの報道を見てもよい。これまで想定外だった事象が生じると、新語が生まれる。その多くは視聴者にとって理解できればよいのであって、使用する必要はほとんどない。若者言葉も同じで、若者同志が連帯感を確かめ合うために使っているところに、気持ちばかり若い教員が割り込んで無理に若者言葉を使おうなどしたら、学生たちは礼儀正しく気を配りながらも、心の中では失笑するに違いない。

次の若者言葉は全国的に使われているように思うが、どんな意味だろうか。

「どや顔」「ディする」「バイトなう(ナウ)」「スタバる」「枝る／枝野る」「与謝野る」「乙」「鉄板」「ネトゲ」「森ガール」

少々解説(翻訳?)を付すと、順に、「どや顔」=「『どうだ!すごいだろう』という自慢顔を臆面もなくする」、「ディする」=「ディスリベクトする／(軽蔑する／中傷誹謗する)」、「バイトなう」=「今、バイトしているところだよ」、「スタバる」=「スターバックスにいる／行く」、「枝野る」=「寝ていない(3月11日以降の枝野氏の疲労・不眠を押してのテレビ会見を若者は大変尊敬し、ustreamでの各局のテレビ放送には応援の書き込みが途絶えなかった。現在は「枝野氏のごとく自分も寝ていない」の意で用いている)」、「与謝野る」=「髪が乱れる／風によって髪が乱される」、「乙」=「お疲れ様!」、「鉄板」=「手堅い／(鉄板のように硬いところから)絶対に大丈夫」、「ネトゲ」=「ネットゲーム」、「森ガール」=「『森から出てきた女の子』のように、ゆるふわのファッション／あるいはそのファッションを好む若い女性」となる。

これらの語の発生年を特定することは一部を除きかなり難しい。「最近の若者は言葉が乱れている上、政治にも関心がない」などと嘆く有識者も多いが、ところがどっこい、学生たちは政治家の発言、世の中の出来事を実によく観察している。ただ、テレビや新聞という媒体を彼らは既に捨て、コンピュータで得られる世界規模の情報を交換し合っているのである。そういった世界規模の視点から見た日本の若者の評価として、枝野氏は動詞に昇格した。若者からこれほどの評価を集めた最近の政治家を、今のところ私は知らない。

「ディする」「なう」は英語の知識を前提とした語構成だし、「スタバる」「枝野る」「与謝野る」

は、見事に現代日本語の五段動詞になっている。ちなみに「与謝野る」の語源は与謝野晶子の『みだれ髪』とのこと、明治文学や文学史の知識まで日常生活のおしゃべりに活用しているのである。これもまさに文化の一端と言えるのではないだろうか。

うか。

このような新しい日本語を発見した時、また意味用法を把握できた時、そしてそれらを学生から教えてもらうとき、私は一瞬、幸福になる。

言語研究センター共同研究

『良友』画報と都市研究

孫 安 石

本共同研究は1926年～1945年の間、上海で発行された『良友』画報の多様な内容を、専門領域を超えた学際的な視点からとらえ直すことを目指すものである。上海で発行された『良友』画報に関する研究成果としては、1930年代に同雑誌の編集を担当した馬国亮が出版した『良友懐旧』（2002年、三聯書店）が最新の先行研究である。しかし、中国以外の国ではまだこの画報を全面的に分析した研究は発表されていない。

1926年に創刊された同雑誌は、中国の政治、経済、社会、文化はもちろん、文学、広告、漫画などあらゆる分野を網羅している。とくに、この画報が創刊された1920年代はアジアで大衆消費社会とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、映画や百貨店などが登場する時期とも重なる。本共同研究はこの『良友』画報を精読する輪読会を

続けながら、2004年8月にはワークショップ「『良友』画報と上海」（上海）を開催し、2007年9月には雑誌『アジア遊学』に『良友』を取り上げた特集号（勉誠出版）を出版することができた。2010年1月には菊池敏夫「上海の百貨店業界と近代中国」（臨時研究会）を開き、8月には上海市檔案館、上海市図書館などを訪れ、『良友』画報関連の資料調査を行うことができた。

本年度は本学の非文字資料研究センターの租界班と共同で「中国のたばこ産業とカレンダー印刷」に関連する研究会（2011年7月22日）を開き、2012年2月には上海師範大学の城市文化研究所と今後の研究活動について意見調整する計画である。来年度は、上海現地でワークショップを開催するほか、言語センターの叢書刊行に向けて研究活動のさらなる活性化を期したい。

言語研究センター共同研究

韓国語の漢語動詞の受身文のデータの整備

尹 亨 仁・文 彰 鶴

近年日本の大学における韓国語のレベルが非常に高くなっている中で、韓国語を教えている教員にとっても履修している学生にとっても非常に大きい問題の1つが韓国語の受身用法の獲得である。

韓国語の受身文は3つの方法（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の受身文）、7つの接辞の付加によって作られるため、その派生は複雑な様相を呈している。とりわけ、日本語と漢語語幹を共有する漢語動詞の受身文

（Ⅲ類の受身文）の場合は、語幹に「-되다(doeda)」・「-받다(badda)」・「-당하다(danghada)」の3つの接辞が付加されるが、この3つとも付加できる場合と1つしか付加できない場合がある。なので、漢語動詞によって受身接辞が異なるため、従来通り、典型的な動詞を用いて説明するだけではその違いが学生に十分に伝わらない。

本研究では、『デイリーコンサイス韓日・日韓

辞典中型版』(三省堂、2010)を参考に「頻度の高い韓国語の漢語動詞」500語のデータの整備を試みた。現在一部の結果は、2011年度の韓国語上級の授業で活用している。授業では、動詞リスト

の提示だけではなく、短文解釈、長文解釈を通して学生たちの理解を高めている。2012年度からは、さらに用例を工夫し、中級の授業でも活用できるようにする予定である。

言語研究センター共同研究

CALLシステム利用の 先端的言語教育のデザインとその応用

松村文芳

CALLシステムのクライアント(学生用モニタ)画面にある「complay(コムプレイヤー)を使用するまでのサーバー管理者の業務を紹介しておきたい。本言語研究センターが管理するCALL教室(314を除く)にはビクター製のソフトウェアCALLとビデオ・オン・デマンド(VOD)を実行するビデオ転送ソフトが導入されている。

学生は画面に表示された「complay」のアイコンをクリックすることによって、VODサーバーに保存されている「*.mp4(エムペグ4)」というビデオファイルを画面に表示して、動画・字幕(中国語・英語)、音声を使用してビデオ教材を学習することができる。

学生にとっては簡単な操作で実行できるシステムであるが、教材作製者にとってはソフトの作成はアイデアの創出と時間のかかる作業が必要とされる。作成のおおまかな作業過程を紹介しておこう。第一はビデオカメラで教材を撮影する(ある

いは既存のDVDソフトを使用する)ことである。第二にビデオカメラに取り込まれた映像と音声を用いてIEEE1394ケーブル(DVDの場合はAVケーブル)を使用して(DVDの場合はADコンバータを経て)編集用のパソコンに取り込む。第三は編集用のパソコンでは「ムービーメーカー(Windowsの場合)」や「Edius」、「Premiere」等のビデオ編集ソフトを起動して、送り込まれた信号を取り込み、「*.AVI」というファイルに保存する。第四にこの巨大なファイルを圧縮して「*.mpg」、「*.mp2」、「*.mp4」、「*.wmv」のファイルを作成する。第五にこのできたファイルを各CALL教室の教員用コンソールに設置された編集機から、VODサーバーに転送する。

以上がVODを使用したシステムの教材作成過程であるが、作成マニュアルが存在しないので既存の知識をフル活用して手探りで作業しなければならないのが現状である。

言語研究センター共同研究

「ロシア語学習・教育におけるレアリアの 内容と位置づけに関する研究」活動報告

堤正典・小林 潔

ここでいうレアリアとは、当該国の言語文化に関する知識のことで、特にその言語運用を支えるものを想定している。このような知識がないと言語学習にもまた実際の使用にも支障が生じる。だが、教育時に何もかも取り上げるわけにはいかな

いので、神奈川大学という現場を念頭におきながら取捨選択する必要がある。

本年は、関連する学内の他の共同研究や学内外の科研費プロジェクトで得られた知見をも活用しつつ調査と研究を進めた。ロシア以外の諸外国で

のロシア語教育やそこでの教材をも検討した。特記に価するのは、9月のモスクワ、ペテルブルクでの調査とフィンランドでの学校見学である。ヘルシンキのロシア学術文化センターのロシア語教室では「フィンランドがロシアから得たもの」をテーマとしており、また露芬バイリンガル学校で

は若者文化を媒介とした教材を用いていた。

これらを分析し参照することで、ロシアに関する知識を殆ど持たないもしくは偏りがある受講生に対して何をどのように提示していくべきかの検討を更に続けていく。

言語研究センター共同研究

「言語の個別性と普遍性 一文と発話の構造」活動中間報告

堤 正典 (代表代行)

本共同研究は、昨年度までの3年間で神奈川大学からの共同研究奨励助成金により「モダリティ・プロジェクト」として活動していた。2011年度は、このプロジェクトにおける2冊目の論集の編集作業が活動の中心となっている。

本年3月に刊行された武内道子名誉教授と佐藤裕美准教授の編による神奈川大学言語学研究叢書1『発話と文のモダリティ 一対照研究の視点から』(ひつじ書房)は、所員にとっての長年の念願であった言語研究センターの叢書の第1巻であっ

たが、現在作成中の論集はその続巻となる。

この論集は、昨年7月24日に本共同研究グループにより開催されたワークショップ2010「モダリティ研究と言語教育」での各報告を中心に10篇の論考が掲載される予定である。前作は対照言語学的な側面からモダリティを取り上げたが、今回は言語教育の視点からモダリティを取り上げる。

なお、論集発行以外にも、現在、年度末に向けて、学外の研究者を招いての講演会あるいはシンポジウムの開催を検討しているところである。

言語研究センター共同研究

中間言語と第二言語習得 (2) 日本人の学習スタイル

アルトゥーロ バロン ロペス

今年度、我々の研究グループは中心課題として「外国語学習における日本人学生の学習スタイルの役割」について取り組んできた。

これまで「第二外国語の習得」に関する研究分野では、第1言語の話者と習得を目指す第2言語の話者を隔てている違いとは何かという点が注目されてきた。その関心は主にそれぞれの言語の構造そのものの違いや双方の話者の暮らす国々の文化的、社会的背景(伝統、宗教、歴史、芸術など)に向けられてきている。一方で、学習者の育った国の教育システムが彼らの学習行動に及ぼす影響

について着目した研究はほとんど行われていないのが現状である。

去る11月25-27日に東京で国際シンポジウム「21世紀、グローバル時代の外国語教育」が開催され、スペインのFundación ComillasのInmaculada Martínez教授が来日した。Martínez教授は学習スタイル研究の専門家で、その博士論文はまさにスペイン語を学ぶ日本の大学生の学習スタイルを扱ったものである。

Martínez教授によれば、教員の仕事は伝達したい内容に対する知識を与えるだけではない。それ

らの内容を伝達するもっとも適した方法を探すことも必要である。つまり、我々教員は、学習者がどんな学生であるのか、また彼らがこれまでどのように学習してきたのかを考えたいうえで、その学習の継続を助けるあらゆる手段を取らなければならないということだろう。

確かに、学習者がどんな学生であるか、そして彼らがより効率的に学ぶにはどうしたらいいかを理解し、それを彼ら自身にも意識させることができれば、自らが決断し、生涯にわたって自律的に学習し続ける人材を育成することができるのではないだろうか。

言語研究センター共同研究

学習者コーパスを活用した上級日本語教育の教材開発

富谷 玲子・高木南欧子

2004年に公開された『日本語話し言葉コーパス』(国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学)、2011年に完成した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(特定領域研究「日本語コーパス」)に代表されるように、近年、現代日本語のコーパスの開発と公開がすすめられている。日本語教育においてもコーパスの存在は広く知られるようになり、さまざまな研究グループによって開発、公開がなされ、研究に利用され始めている。日本語教育では、これらの基礎資料を統語構造の分析への応用や、教材評価、コースデザインの開発など多岐に渡る応用がなされるようになったと同時に、比較参照するための学習者コーパスの必要性も求められるようになった。学習者コーパスとは、第2言語学習者の作文や発話データを大量に収集、分析に必要となる情報を付加し、検索が可能な形に電子化したものを指す。対照言語研究や誤用分析、教室活動の分析などから得る知見を教室活動に還元する際、学習者コーパスを参照することにより数量的な分析が可能になる一方、従来とは異なった知見を得られる可能性もある。本研究では、学部留学生に対する日本語教育への還元、初年度教育としての日本人学生に対する日本語教育への還元を可能にする基盤構築を目的としている。現在、一般に公開されている日本語の学習者コーパスは「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース(作文対訳DB)オンライン版」(国立国語研究所)、「KYコーパス」(OPIテープを文字化した言語資料)などがあり、進行中のプロジェクトなども多々見受けられる。これらの学習者コーパスを構築という点でみた場合に

共通してみられる問題点は、学習者の母語や学習歴などがさまざまである上に、書き起こされたテキストや発話データに対するタグの付与に非常に時間がかかること、また、言語運用場面や目的が多岐に渡ることである。しかし一方で、細かい分類と膨大な基礎データの支えがなければ、期待する抽出結果も得られにくくなり、コーパスとしての有用性が低下する。解決策の一つとして、抽出結果を上記にあげた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』とつなげ、参照を可能にし、付与される情報の客観性、信頼性を向上させる試みや、特定分野の専門辞書を組み込むことによって精度を向上させる、辞書の更新・増設を可能にするシステムを採用するなどの試みがみられる。これらの試みは、学習者コーパスの設計には非常に参考になると思われる。

